

今思う事

～ 一日一日を大切に、
今年も頑張ります ～

いとう いさお
伊藤 功

●自治労・書記長

一昨年は、自分自身の経験則を通じた労働運動を次世代にどう繋いでいくのか、昨年は参議院選挙闘争を通して得た今後の具体的課題と展望をテーマに執筆した。今年は、今感じていることをつらつらと記してみたい。

両親との別れ。私の母は3年前に、父は昨年夏に他界した。いずれ来るであろう2つの死に直面し、改めて気づかされこと、それは、①限りある人の命の尊さと、②自分がこれまで大過なく暮らせてきた礎をつくり、支えてもらった両親への感謝である。

東京に単身で住み、5年目を迎えた。自分自身も58歳、いつの間にか還暦の一步手前まできている。日本人の平均寿命は男女ともに80歳代と長くはなっているが、果たして自分が、いつまで生きられるのか。自問自答を繰り返している。

誰しもが共通するが、その寿命に何の保障もなく、いつ何時なにが起こるかわからない。両親の死を通して、今更ながらだが、いつ亡くなくても悔いが残らぬよう、この瞬間を、大切にしようとの思いが強くなっている。

最終的に、自分自身で選択し、身を投じた労働者運動の世界。今の活動の基本は、格好よく言えば、格差・差別・貧困を許さず、働くものが平和で安心して暮らせる社会をつくること。そのためにも多くの人たちと連帯した活動を行いながら組織づくりをすすめること。その信条をもとに、今は、産別組織の執行部に籍を置いている。

当たり前のことだが、産別組織の執行部として頑張るには、信任投票が不可欠。立候補

するその任務役割について、向こう2年間任せて貰えるのかどうか問われるもの。大事にすべきは、思いが託された一票一票をしっかりと受け止めた実践。私自身、ちょうど昨年8月末の産別大会がその時期で、常にその日のことを思い返すようにしている。

単組時代から数えれば、30年も経験してきた信任投票だが、自分自身が果たすべき任務・役割と具体的目標をもって、精一杯頑張ろう。与えられたこの時間、瞬間を大切にしよう。これまで以上に意識している自分がいる。

さて、情報手段、情報網が限られていた時代を経験してきた1965年（昭和）生まれの私にとって、面食らうのが、大量の情報量。昔と違って、今や真実も虚構も、技術を駆使したフェイクニュースまで、様々な情報が氾濫する社会となった。随分とまどう面もあるが、最近、時間があればユーチューブ動画を観るようになった。音楽から格闘技、近代では戦前、戦中、戦後の国民生活と政治を紹介する動画等も含め、いろんなジャンルを観始めている。

とくに、両親の死を通して、「限りある命を大切に、精一杯生きる」との意識の強さも相まってか、生まれてすぐに、不治の病にかけ、数年で亡くなってしまった子どもと支える家族の姿を記録した動画。一方で、子どもより先に若くして亡くなってしまふ父親、母親と、寄り添う家族の姿を記録した動画などを観ている、全てが情け容赦のない真実の世界。



一昔前までは、こうした世界はほとんど知らされず、知らないままに過ごしてきた。動画を観ると、ほとんどの当事者は病院の病室という世界しか知らない。されど、その中で、精いっぱい生き、絵をかいたり、音楽をついたり、何もつくれなくても、自分が生きた証を様々な形で残そうと日々努力していた。必死に生きようとする懸命な姿とそのことを支えようとする家族の姿に心が痛む。

動画を観るたびに、いろんな世界に関われる自分の恵まれた生活と、こうした環境を整えてもらった両親と家族、友人・知人への感謝が一層強くなった。

こんな思いを持つ中、国外では、今この瞬間も大切な命が奪われ続けている。ロシアによるウクライナ軍事侵攻は止むことなく、新たな紛争も惹起し、毎日死者を出している。いかなる主張があろうとも、罪もない人たちの尊い命を奪い続ける非人道的な行為を許してはならない。

残念なことに、足元の日本においても、仮に自国が攻撃されたら反撃する能力をもつべき。その体制も軍備も増強するべき、そのための防衛費も増額すべき、こうした主張が着実に増えている。

戦争がもたらす凄惨さ。それは単に過去のものとして、非現実的なものとして受け止め

られているのだろうか。

私自身、とくに第二次世界大戦の加害国、被害国いずれも何度も訪問し、学んできた。戦争は必ず人を変える。喉元過ぎれば熱さを忘れる。例えとしては極めて弱いが…同じ過ちを二度と繰り返してはならない。

単身か家族同居か、収入が多いか少ないか、様々な構成によってその生活様相に違いはあれど、また、格差社会が故に貧困層が増えていることも事実で、そのことも大問題だが、一般的には、朝、目が覚めて、消毒された綺麗な水道水で顔を洗い、朝食を食べ、歯を磨き、トイレで用をたし、通勤・通学。昼食を食べて、職場・学校でいろんな人と話し、家に戻ってからは家族と話し(一人の場合もある)、晩御飯を食べて、あったかいお風呂に入り、安全な場所で眠ることができる。

いつも楽しい時間ばかりとは限らず、喜怒哀楽たくさん場面がある。されど、平和な社会だからこそ、四六時中無作為の攻撃に怯え、眠ることすら許されず、着の身着のまま、隠れる必要もなく、清潔で健康な日常が保障されている。こうした日常を、平和な社会をしっかりと守ることが必要＝武装ではないはず。

昨年9月、憲法を軸に、政治政策のありよ

うを説いた又市征治という政治家、労働運動家が亡くなった。私自身、その生き方に少なからず影響を受けてきた。2024年は改めて、憲法9条はもちろんのこと、憲法13条（幸福追求権）、14条（法の下での平等）、25条（生存権）など、国民として、等しく保障された権利に基づく政治・政策となり得るよう、働くものが安心して暮らせる社会に近づけるよう、微力ながら頑張りたい。